

第十三號室

第十三号室

^子トランドの町々のうちで、グアイボ
 ルグは、まさしく高い地位を占める。この町

は僧正の官区に属して、またか^優

まうちく新築の大伽藍、たのしい^園、大

寺湖水、そのわ^自

その近くは、デンマーク中で

もつとも美しい町の一つに数えられ、ハルト

がある。さうしてそのまゝついでに、フィン

デラツプがある。ここは、一ニ八五年、^聖チ

エチリアの^聖日、マルスクステイツグが、エリツ

ク・グリツピング王を^殺弑したところだ。十七

世紀になつて、エリク^の墓^にの^墓石^が発見^{され}たが、

その^{頭蓋骨}は、^{角を}鉄^で鎖^で繋^がれてお^つた^痕跡

が、五十六もあつたといふ。——だが私は、

案内記を書いたりののではな

ヴァイボルグは、いいホテルがある。ポ

ライスラア・ホテルと、^{フエニツクス}不死鳥ホテルが^好ま

今にその経歴をお話します

古くて興味が

しい。だから私の甥は、はじめをヴァイボルグ

を訪れた時、^{コルツン・ライオン}金獅子ホテルへ^白行った。雨未だ

は二度とそとへ^行つたことはあるが、

それよりさきのページ^は、^{たぶん}彼の行のよい理由

の説明をするだろう。

金獅子ホテルは、一七二六年の大火で、大

火を蒙り、そのついでに少数の^{建物}建物の^{中の}一つで

ある。あの大火では、ソグネキルケ寺だとか、

ラアドフウス寺だとか、そのほか^の多くの

建物が、^{宮内省}宮内省蔵に灰燼^のに帰してしまつた。

のめあしん。大しめい
しよと、ほ
それか

らしかつた。

日取上階は、一日の仕事のあと、あやり

多々階段をのぼるころきりらとい

ので、拒まれん。三階は、ほしいといは

どの廣くをもつた部屋めあつた。大しめい

二階は、大きさといは、結構

文通りの部屋めあつた。二つ三つあつた

つた。

主人は、第十七階室を、ひどくもつあけた。

頃のものを。

夕食の時間の近のずいた。いつもの沐浴を

し、元氣づいたアンダーソンは、階段を降り

て行つたが、その時はまだ、食事の合図の

ベルが鳴る二三分前だった。彼はこのわずか

な時間を、宿泊人名簿表を調べることにあて

た。デンマークの常習常では、宿泊人の名は、

大きな黒板に書き置き表示されるのだつた。

その黒板には縦横の線が引かれ、横線のはじ

めには各部屋の番号が書きこまれて

た。表ははべつらきつたこともなめつた。一

名のドイツの辯護士と、コッペンハーゲン

のりまを、数名の旅商人の名のみだけだつ

た。ただ一つだけ気がかりの種ともなつた點

は、都府へへちをつくらぬ、十三と

いふ番號が、とり除かれようことだつた

アムステルダムは、デンマークのいそんをホテ

ルで経験して、すむい何度か心づい

ていふ事だ。ところでは、特殊

の番號へ向けて、文句をいふことか、んえ

通 養 倒 だ とい う け とも、 と う し と そん な い 廣

く 根 強 く ひろ かり、 そ う し と 札 を お け た 部 屋

を 貸 す こ と を、 困 難 り と い う の ぬ と い う ね

わけ を、 怪 し ま ず い は い ら れ ず の つ ん。 て、

彼 は、 旅 館 の 主 人 へ、 ^{一 胃} ~~あやうや~~ や 同 業

者 達 ぬ、 十 三 錦 堂 に は い る こ と を 断 ち ~~あやうや~~

に、 ^{實際} ~~あやうや~~ 出 く わ した と ^{四 平 山 の 名 也}

と ぬ あ る の じ ゅ の じ ゅ の じ ゅ の ^と 訊 ね ら れ ぬ

み よ う と ^{思 っ} 禁 断 せ ら れ ぬ。

又 食 の 時 間、 とん な と と か あ つ ら ぬ ^{あやうや}

については、アングロソンは、なにも行い

ない。さうして夜間は、着物や本や書

類の整理を

て、更んこれといふこともなかつた。

十一時頃、彼は床に就こうと思つた。しか

し彼は、今日まくの人がやるように、眠り

に入らなかつた

本を二三ページ読むこと

必要を強備工作だつた

中で読めとしておいた本を思い出した。その

本はさう時讀むには、なんすりもつて来いの
 もので、食卓のその懸け釘のけておいた
 外套のポケットに入れてあつた。

すい駆け降りて取つて来た。廊下はすこし

も暗くたつたので、とどつて自分の部屋

見つけることも、裏側 面倒にはな^いと、

まあ、さう思つた。だが、部屋の前へもど

つて、ドアの把手とつてをまわしたら、ドアはまづ

たく堅く開いて開のなかつた。しかも鍵は、

うちから、裏側 前かドアの方へ、急に

動いて来る物音を聞いた。無論彼は、そのド

アが、間違っているかどろか調べた。自分の

部屋はその右か左か？^(右の)^(左の) 彼はドアの番號を見

た。それは第十三號室だつた。

では、彼の部屋は左のはずである。果して

そうだつた。そこで彼はベッドにはいり、五

分、まじみの三ページを讀み、^{あかり}燈火を消

し、^{眠り}寝籠に就くと寢返りしたが、その^時邊

^ふと、ホテルの黒板には、第十三號室を

んと此のは書いてあるつたので、今、たゞ

その番館の部屋があつたことを愚思ひはかへ

た。彼はわくろ、その部屋を自分の^{部屋に}新屋を遷

~~屋~~のつた^のは、強念だと思つた。

その部屋を^をあつた^は、自分はこの^{旅館の主}

人、ちやうと役い立つたかも知れなうのだ。

^{一個の}まき正しい^{イギリス紳士が、}三週間も

その第十三^番室に居た、しかもその部屋が

大いに賑入つたといふ言ひ草を、主人に與

えあつたかびでさかかも知れなうのだ。だが

その部屋は、たぶん下男部屋か、或はそ

かつたよりの見えない。まあまあ、まあ！こ

んをとりとめもない妄想すりも、眠りが大事

だ。——で、仲は眠りに落ちた。

到着の翌日、ペンカーソンは、少アイボル

正目おしと出みけ

かのリグサルキープ寺を御免なする御免書を御免書した。

御免書は御免書

彼は、テンマークでは例外ででもあるよりに、

性く御免書出さされ、五で見たいと

御免書思ふものへ此

字の許可、容易に與えられた。

細の前の並べられん文書類は、まつた

強期以上、かつと敷も夥しく、しめと味

のあつたのだった。書公文書類のほかは、

ヨエルゼン・フリイス僧正の書翰一束があつた。

この人は僧正職になつた最後の馬場教徒で、

これからの書翰は、この人の私生活や個性を

知る上は、ほなほたおもしろい、且つ

「親身しんみな」
「書翰しゅわん」

(詳叙)
「書翰」といふは、（馬場） 収められている

のだった。そのなかには、僧正がこの町で、

住んでいたのであるか所有していた一軒家

についての多くの話の書物がある。その傍

家人は、（貝のけけや） 馬場（馬場） や、（馬場） 僧正令り討（馬場）

誹謗を誦つたり、お魔をくたりする人物かし

かつた。書翰いふと、彼は町の^耻あつてゐる

つた。彼は秘密な邪悪な術を^{おこな}つた。悪魔の

魂を愛つた。かよふな毒蛇とも吸血魔とてい

ふべき人物^{悪魔} ^{おこな}

^{僧正} ^{僧正} 家を^使使して ^{保護}保護を

うやむやにして、^{四馬}四馬教令の^大大

腐敗^大迷妄も同然であつた。僧正は大膽

に、それらの非難^{にさう}を蒙つた。僧正は^{その}その

ような秘法といつたものは、^{自分も} ^{唾棄} ^{すく} ^棄

する暇しめなかつた。で、記録所がその日閉

鎖される前、その大意だけを^{蒐集し}寫した。この大

意は、キリスト教徒が、今はもはや~~四~~四

馬の僧正達の決定によつて、束縛されていな

かつた~~事~~こと、~~その~~僧正の清廷は、~~を~~

うしろ車大問題を裁断するよき、適切な、

機能ある裁判所ではなかつたし、あり得るか

つた旨のものだつた。

アングライソン、~~は~~記録所を^{した時}停止した、
一

人の老紳士といつしよひなうた。この老紳士

は、記録所を主宰してゐる人で、^{たつた}あつて行

くくすれ話は自然、いまいつた又書類に向ケ

られん。

このグアイホルグの^{アーキウイスト}記録保管人であるスカ

グエニアス氏は、善管理してゐる記録類一

般の類とは、なほ平めよく知つてゐるが、

改革時代「^{ナラセの}字制改革」の記録は、^は専門家で

あつた。で、~~その~~その記録

について、アンダーソンが讀つたことには、

いふれも~~いふ~~もつた。彼は、アンダ

山崎の野矢の書

1ソンの話の内容をまとめ、出版された。

目を、鶴首して侍つと言つた。

曰例のフリス僑正が所有した家です。

ぬ山と、彼は言母をツツけた。曰その家の、

どこに建つていたか、おいは大妻を難肉で

すよ。おはすいおんは意しと、古代がアイボ

ルガの地誌を研究したのです。だが、實に

驚きこといはいは——僑正所領たつたといふ

地の記録がなつていふのです。それは一

五六〇年の伝説と云ふもので、
その町の財
表裏をみる

（産目録が記入してあり、大
部分アルキ

一フ寺に保管されていたのだと。いや、まあ

いいでよ。
いっつのは、
私は、フリス堡正の事蹟

と書きたる 掘り出して見せまをよ。

それからなにか散髪をしんあとで——私は、

彼らどくどく、どくどくのか、
はつきり

知らないう——アンドンソンは、
夕人食ぐト
金獅子を愛

ランゾのペーシエス越ぐ、就眠のため、金獅子
生きた時をいかに楽しもうと知らぬを愛するを愛す

ホテルへ帰つた。
おもむきながら、

自分の部屋へ行く途中、彼はふと、このホ

そのうちで、足音と聲を聞いたから驚いて
ある。

番頭をたしめろため、彼の侍はニニ~~三~~^{新の}

間、うちがの足音はやんだ。どくやふトアの

ついでさばしい。そとをあらわいひりも激昂

くさいる人物のようよ、せあしげなシユツシ

ユツといへ呼吸を耳^{たのて}、響きだつたりし

た~~ら~~で、自分の部屋へはいつた、部屋の大き

おまへ、この部屋を~~選~~定した時よりも、ず

つとめさくなつて^いる^たので驚いた。それな

としげんのちやうと

ちやうと先送すべきことだつた。もしげんと

うに大きくないのだとわかれば、
部屋をとり

わけなく

かゝる^{てしかうこと}を^{あつた}かひなきのたつた。ちやう

どこの時、彼はまにか——私の記録してらる。

限りでは、ハンカチだつたと思ふ——
と、

^旅行靴 ^{あつた} ^と

運搬夫

思つた。その靴は ^か ^い ^べ ^ッ ^ト ^あ ^ら

思ふことも事なかして、

もつとも遠い、部屋のおこりの壁にさすわけ

にある足草のよへ、買いて行つたのだつた。

ところか、富りへんを事は、靴は見えないか

つた。

それはおせつかい
それはおせつかい
下男か、取りの

けて、きつと中身を、衣裳留甲筒へ入

れたのしめつた。だが、あなたも衣裳留甲

筒にはまめつた。それは固つた。泥棒だとい

ふ考えを、彼はさう言ってきた。そんなことは、

デンマークでは、めつたにまゐることだつた。

だが、ちよつと一に問掛けは、たゞぬれ行わ

ぬること ^{はあつた} (それは珍らしいことではな

い)。そして同掛け者はきびしく戒められな

ければならない。しめし、彼の答へたものか

をんだつたにしろ、それは、舞妓の氣持みか

らいつて、鞆まで待ちきれないほど必要なもの

ではなかつた。たぶん仲は落ついて、ベルを

鳴らし、下男たちを騒かそうとはしなかつ

た。彼は窓心——右手の窓——へ行き、静かな

待末 傷跡をのぞき出した。
向う側には、
だだ

フひろい平壇をもち、
丈
高い建

物があつた。人つこ一人通らない。
暗い

見ると足
を歩かせるものはなにもない。

燈火を背にしていたので、仲の影は向うの

垂^し降り、はつきり映つた。ま、左のほうに

は、第十一号室にり、^{はつきり}影のある客の影も映

つた。袖はきみやつを着て、一二度^行まつ度

りつし、^髪髪を掻きまきまきにブラシをかけ、

やめてお向着と看めえん。

すよとま、^客客の影を映し第十三号室の客

の影が右のほうに映つた。これは更に^影影味

あるものだつた。十三号客は、^客アングーソン

のよりの窓^窓に肘をみけ、往來をのぞき出し

ていた。^男腰背の高い痩せた男の影に思わ

たーあるいは、もしあると女か？……す

くなくとも、それは、ある種の布きれで頭部

を包んでいる何者か、ベッドへ行く前、

赤い笠をかけたランプを持って戻り、その

度ほどく揺れているにちぬいさしおつ

た。最後に向うの塔の上、^は樹討陶しげ

を赤い光が、上下にはつまり動いてい^{た。ア}

ンカーソンは、^{その人物を知りた}

と思つて、^{首を伸ばした。}だが、内高

間の上の、ある^{軽い、}なぐた

か白い布地の服のほけりは、ちんちんと目くらこと
ほでまきまのつん。

そこへ、結末で、遠くから足音が聞える。
二つ

それの世のつとをみるも、十三階
いこまなのは

主人、~~おぼろ~~おぼろの、~~おぼろ~~おぼろをいこうことを、さそ
ある見えたと

いこるなめだつんらしい。十三階の人物は、
窓からパツと覗れた。そこを赤い光は照えた。

アンダーソンは、巻煙草をふみしてつたのな
み、善美鳴を窓に置いて、ベッドへ行つ

た。

翌朝アンカーソンは、湯やその他を持って

また下回抜け者しに起されん。
目をあげ
~~怒り怒り怒り~~

彼は、正しいデンマーク語を考え、でき

るだけあつたよりの言つた。

「おい。お前は私の靴を動かしてやいか

んよ。どこへやつたのだい？」

こゝろなまゝことは珍しいことではなるとい

ふられ、その下回抜け者し——女中は笑つた。

そゝろ ~~怒り怒り怒り~~ 返りもしないで出て行つた。

アンカーソンは、あゝろ ~~怒り怒り怒り~~ つて、ベッド

自身を起し、女中を呼びかえそとしくんが

彼は自ら動きまわす目を見はつんまま

（前）
（目）

動かぬのつん。そこは、靴は、彼ははじめ到

着した時、運搬夫が置つんと、まったく同

じ場所の足基の上、のつかつてゐるのだつ

た。これは注意力の精確さを誇る人内へと

つては、
とんびしやい
衝撃手たつん。

どうしてこの靴が、昨夜、ここから逃げ出し

はあ

たのか？
彼はあかきよあうな靴はしなかつ

た。しめし、とんかく、今、靴はききそん

ギョツとまゝのことに出くわした。 ^目はよつ

ほど ^{ほやほや} しゃべりながらいふ。だが、

ツドへはいらし前、 ^{たの}右側の窓で喫煙した

は、十通警の上も控つてい。ところが、今

と、吸殻はまん中の窓の間に置かれて

いふはなにか。

彼は ^相食のため下へ降りて行くとした。

すこし ^{お狭間} 間を歩いてきた。だが、十三号室 ^の

は、もつと ^{お狭間} 狭間でいら。 ^{この} ドアの前にはま

だ編上げ靴か置かれていた。——紳士 ^の 靴

だった。おまけ十三號室の人物は男だった。

女ではなかった。その時はドアの上の番

を見た。それは第十四號室だった。義は

十三號室を、通り過ぎたらしいやいと

思った。十二時間のうち三度り問拔けた

違いをさすやうで、規則正しい、
心こまか

五人間にとつては、
多すぎた。そこ

で確々たるために振り返った。十四號室の

次の部屋は、彼の部屋の十二號室だった。第

十三號室も、結局ありはしないのだ

つな。

五六分間、

この一書目後に経路を
いろいろ
いろいろ

（たぶん）
を、よくよく考え直してみれば、ア

ンカーソンは、この問題を（~~いろいろ~~）
（打ち切る）とにし

た。もし彼の視覚なり頭脳なりが、まさつて

いなら、彼はこの事実を擇り出す（多くの）
指令を持つ

た筈である。そしてまことにしても、きつと~~非~~

常に~~出~~時ある経験をいふ筈である。いづれに

しても事件の発展は、たしかに注目し得いし

た筈である。

その一日中、彼は、前々言つたあの僧正の

書翰を研究しつづけた。残念なことは、書

翰は不実金だつた。ただ一通だけは、ニコラ

ス・フランケン博士の事件に關係してゐるもの

であつたことがあつた。それはヨエルゲ・ン・フ

リース博士が、ラスムス・ニールセンに宛て

たものだつた。こんな文句があつた。――

曰われ等は、法廷に於ける貴下の裁断に對

し、承服するの心、^{いささ} ~~無~~かもしれなく、且つ必要^{そのため}

に應じては、^{断乎} 断乎貴下の抗辯すべき存念に

昔々から書翰を研究するは、
法廷に於ける裁断に對し、
承服するの心、
かもしれなく、
且つ必要に
應じては、
断乎貴下の
抗辯すべき
存念に

に候いしも、わが信實真実にして愛すべきニコラ

ス・フランケン博士は、まさしく聖下の錯誤にし

て悪意ある嫌疑を被せられたるにすぎ、

^{突然}あれ等 ^{より除去せられ} ^{申候} まはあり ^{いか}

に末汚濁世の問題たるべく候。而も聖下か更

に進んで、使徒に聖書と大侍道者たる聖ヨハネ

が、その至高なる黙示録に於て、神聖書

羅馬教令を「緋衣の婦人」すなわち「聖教」の少女にて叙

述せりと主張せられ候こと、よくこの間の消息を

俾えたりと存せられ候。云々。

おれふん穿鑿^{せんさく}したのだから、アンダーソン

は、この書翰の結びきを発見 ~~でき~~ ^{できなかった} できなかった

かつたし、~~その~~ ^{ケイサス・ベライ} 開戦理由の

除去し ~~その~~ ^{その} 原因 ~~が~~ ^が 方法 ~~は~~ ^は について、

おんの手がかりも発見できなかった。 ^{ただ} 彼は

ランケンが、~~突然~~ ^{去した} 死 ~~後~~ ^し のたと想像 ~~を~~ ^し した

だけだつた。すなわち、ニールセンの最後の

書翰の日付——その時は、おれおれまゝ、フラ

ンケンはおれ ^{おれ} した——と、偽正の書翰の日

付の箇には、二日の差 ~~を~~ ^を したので、フラン

手紙を宛先へ送る

ケニの死は、まうなく不慮のものでなければ
あつたのであつたのである。

午後、~~書~~マニダーションは、ちよつとハル

ト●町へ^{出かけた}行った。そしてベツケルンド街^へへ

を^{知性の點で}飲んだ。變^いいささか神経質^いはなつてい

たが、^{彼は}今朝^は驚き恐怖に追いや

た^い経験のような、視覚や^頭脳の失敗の要^い徴

候^があつたことに、気がつめなかつた。

夕食の時、彼は旅館の主人のそばへ行つた。

その時、彼は旅館の主人のそばへ行つた。その時、彼は旅館の主人のそばへ行つた。その時、彼は旅館の主人のそばへ行つた。

ツツク

ツツク

なにかさり気ない話をしなると、彼は訊いて

た。曰くのデンマークへ来ると、
(大抵)
その話の

ホテルで、十三号といふ部屋番がけふか

れこいませぬ、
~~お~~いつたいどうも
おけで

すらぬ？
このホテルにもないようです

ぬ。

主人はおもしろげにうなづいて、曰はん

こととお考えなさいとは、
あやうもそんなこと

はお氣がきななですま。新田もそのおけを知

ろうと思つて、自分で一二度考えなことをあ

ーソンは口を挿んだ。可では、あなたも、

十三日空を走つといふこと、特別さしつか

りかあるとは思われないのですか？

可^{ああ}、さうでもなくも。おさんの通り、私

は金^先を父に、この家業を継ぐように育て

あげられたのでした。父ははじめてアアルフウ

スでホテルを経営してまいりました。それ^{これ}が私

たちが生まれながら、このグアイホルグへ移^つ

たのでした。グアイホルグは父の御屋敷で、

このエドの

フエニツクス

死ぬまで不死鳥ホテルを経営してまいりました。それ

旅行一才リツ

は一八七六年のことです。それから私はシ

ルケホルグでウツキを始めたの、つい^{一晩}数年、私は

ポルゲン・レーオン

この金獅よ、ホテへ引き移ったのでした。也

ついでには、

~~ウツキを始めたの、~~引き継いだ時の、

旅館

この~~ウツキ~~やウツキの状況と、くまごま話しん。

中で、あつた^いこの家へ来た時、十三

御室さんて部屋はあつたのであつた？也

コイヤ。それをお話ししようとしていん

侍屋のようは、ころしん

~~侍屋のようは、ころしん~~ 旅館

善通寺へ入れるお客さんは、~~お~~お人階級——

ある人です。大事を得意先を失うとか、
人とのぬとみぬ。と、主人は、
なか写生的な
言いふりを考えをゆか言つた。

曰じやあ、

左様なもあつた
おそろしきとあつた

あつたのうちで は、弟十三 第 室 と 使 つ て い る

そ の た め

のひまか？と、アムカーソンは訊いた。

問題の重要とは、まさでちくはぐに、
奴な

気が^かま^りな^な言^ひを^して^は口^にい^はれ^たの^だと、
自^分で

そ^う思^つた。

「うちの十三^第室^とですつて？」
へえ、
私は

この家は、そんなものは有りはしないよ

申しあげてもじやありませんか。おはあなた

がそのことを、認めてくださつたと考えてい

ましても、……もし、その部屋があつたら

ら、あつたの部屋に近づきに行つてみるはず

ですわね。

「ええ、そうです。ただ、おつと考えたこ

とですか——おは、昨夜、その番席の部屋を、

あの廊下で見かけたと思つて居ます。ええ、実

際、まうたうまうたいなうね。というのは、

一昨日も、同じくその番地の部屋を見つけたので

すめりぬ。」

アンダーソンが豫期より早く

無論、主人のクリステンセン氏は、この意

義するよりいかな

見を軽々しく断る。彼は、このホテルに、

法

第十三番室は、彼が引き継ぐ前

の客室を

れもなかつた。あまふたひ程りかえし

といふ事

て強調する。

主人の確言よりして、アンダーソン

は自分

安心したもの、まが迷つた。彼は、

自分が錯覺のとりこになつたか

うわ、それはともかく、主人と、その晩お申

おいでませいと

そく、自分の部屋へ喫煙に招くか最上の方

だと考えるようになつた。ちよくと持つて来

たイギリスの春着(町々)の富貴が、招くにいい言

い言葉となつた。

クリステンセン氏は、うまくい龍終り来た。

ぬ常いよろこんで招きを承知した。十時頃参

りましよると言(つた)つた、アンダーソンは、そ

郵便

のねはうたぬ

の前の書多々手紙があつたため、一度部屋

へ戻つた。自然(こ)すゝことは、いわけし和のい

か、彼は、第十三号室の存在問題について、

まうたか 神経質にまつていん 毒薬とは、打

論し得ざる事實であつた。

この極

彼は、第十

三 号室の前を、第十三号室のドアのあつべき

場所を、通りぬけたくなつたため、第十一号

室の方を道を通つたようになり、第十二号室を

自分の部屋へ行つた位だつた。

部屋へはいり、彼はすばやく、念入り

に手取りを見まわした。

これは

部屋がいつもより

おさくま つて見え

といふ、

あの

解釋し難い

感

じのほめは、彼の疑懼を証するに足るなれも
 のもなかつた。まゝ今夜は、例の旅行靴の有
 無の調査も問題もなかつた。といふのは、靴
 の中のものをさうやり取り出して、空靴をべ
 ットの下へ押し込んで置いたのだつた。
 努力して彼は、四の中から、第十三號室とい
 の懸念を追い出した。さうして手紙を書くと
 めと椅子にすうた。

陸室は、まうたくシンとてりた。時にト

アが廊下の方へ突り出て、編上げ靴が抜け出

されり、客の旅商人がなにか口の中で鼻歌
 さう自ずりながらあつた。そとは、おりお
 り荷車が、ひどい石ころを^道カタカタと通つて
 行つたり、敷石の上をせわしげにあらく人の
 足音がまぎまぎといた。

アンダーソンは手紙を書きおえて、ウ
 イスキー・ソーダを注文した。それから窓へ行
 つて、向うの平庭とその上に見える影を研究し
 た。

僕が¹⁹¹²の留めをりる限りでは、第十四号の室

は、辯護士が占領しつた。食堂でも

ど口ときめず、いっと四のわきん 小東の書類

を回して、そのい讀み入つてくる、埃ちつ

大甲たつん。だが、ひとり ~~あきら~~のなると、

あきらかか獣性を発する習慣がしかつた。ど

きければ、どろろあんまに踊れよう？ 陳

室町の影は、たぐわんそくであつたと示

しつた。あん度とよく体の細いわがんは心

を横切り、両腕は打ち振られ、瘦せん足は弱く

へまきま早やまど跳あげられた。彼ははなし

いしおつた。そして床板はよく敷かれている

お古だつた。^{（女中さん）} あんなに賑わまわ

のに音一つくもないのじあ。ホテルの宿室

で、夜も十時になつてゐるのに^{（狂）} 眠つてゐる、

この^{（辯護士）} アンデルス・エンビ

ン ^{（お嬢様）} 氏は、左にかまをたし居使

画の好題目のよふに見えた。その後アン

ソン氏は、あの「ワウドルフオの神秘」

の「エミリー」^{（イギリスの女流小説家アン・ラード）} クリツフが一七九四年に發表し

た^{（お嬢様）} 怪奇小説「アペナインの中世古城」は、^{（お嬢様）} 好座の行動と描叙したもので、イギリスの少女エミリーが^{（お嬢様）} 特種的主人公。

たとえ隣客ともしるとも、

踊りつづけめ更になほ、

われ法律に馬はれ身ぞ、

さしははせしれ人のその、

彼等が抗議思ふせん。

もし旅館の主人が、この時ドアをノックし

たつたら、おそく ^{へいほうを} まるる屋敷長詩を届と、

讀者の書に提供し得たかも知れない。

却屋にはいつて来た時の、愕然とした顔色

~~~~~~~~~

から判断して、クリステンセン氏も、アング

ーソンが <sup>酔った</sup> 酔った よう <sup>に</sup>、部屋の中の手づか

ちを様子には、ハツと撃たれたさしかつた。だ

の彼は、なにも言わなかつた。

アングーソンが <sup>は</sup> 見せた字彙は、彼を大いに

驚かした。 <sup>彼は</sup> 彼は、いふ人々自傳的

話題をもち出した。 <sup>は</sup> そんなことで、もし

るの時、あの隣りの辯護士の、喝いはじめ

のつたら—— <sup>は</sup> ちやみん酔つはいつてゐるか、

それとも気の狂つてゐるか <sup>とさ</sup> 責めたりはか



こもる冬風の、  
*（書き加え）* 空は曇り、  
こめられた

空は曇りの

オルガンかといふたより、  
絶望的な呻き

なつた。それは言葉がそろしい御書きたつた。

もし自分一人がくそにワたら、きつとちかく

の旅商人の部屋へ、助けをくれと逃げ込ん

んて聞いてみると、アンダーソンは思った。

旅館の主人は、おカんと口をあけたまま

あけていた。

「おん *（かたがた？）*」と、彼は鼻の冷汗を拭

口を切

「おん、やつと *（口を切）*」つた。口はろしい！

つたか一度あれを伺いんくともありませぬ。だ  
め、私は ~~おまゝ~~ 猫の仕業だと信じていたん  
ひす。

口氣の狂つてゐるんだな？と、アンダー  
ソンはまづら。

口きつとそくです。まあ、お氣の毒な！あ  
んいのお山谷さんで……~~き~~ 噂はすると、家業は  
は丈夫成功し人で、そして、育てあげべきが  
子供さんもあるとのことです……

ちよつとその時、たまにふいふくをノック



かドアにしたかと思ふと、そのノックした人  
 は、訝しむ待ちきれない風で、扉を叩いてま  
 た。それはあの辯護士だつた。ふたん着のま  
 まで、ひどく髪を振りみだして、さうさうい  
 んと傍へとつた様子で。

「おめい、そささい」と、彼は言つた。何と  
 か、おやめくたされば、まことんありべん  
 のですか——」

こくまわい  
 言ひあけな、彼はききかへ、

んだ。といふのは、前へいる二人が、  
 三人とも





の部屋には煙突がなくてないのである。私はあの

階へ、ここから(出)のどと合点して、ここ

へ来たのでした。あの階はてつきり、私の次(部屋の)

の部屋ですよ。

曰 あなたの部屋と私の部屋の間には、部屋

をえて、よいじやありませんか。と、アノカ

ーソンは執回ひ言つた。

曰 ええ、そうです。と、<sup>イ</sup>エンゼン氏はわし

を鋭く、曰 すくなくとも、今朝はなかつた

です。



士は言つた。曰やんか話がありまじか？ これ

はどししたわけぢやか？

曰やん！と、クリステンゼンは言つた。曰と

うして話なんか！ 新だつてあそびたは以上

い、なれも存じませんよ。どうぞ二度とあは

たび、あんな聲を聞くことのあつませんようい。

曰新だつて。と、エンゼンは言つた。そし

て吐息の中になんかさう混じえん。パンクーンに

は、そのたはんまが聖書の詩篇の中の、はつかりしんがと解の

ミサハ "Omnis spiritus laudet Dominum."

(まんど等上ホバをほめたえよ) であるよ  
 りん思えん。

曰くぬし、この三人で、まにかしなくちや  
 いけませんぬ。と、ペンダーションはよえつた。曰く  
 リの部屋へ行つて、調べてみよ。じやありま  
 せんか? と

曰くぬし、あれはイエンゼンさんのお部屋で  
 すよ。と、主人は咽およりに言つた。曰く行つ  
 たところまでつまりません。イエンゼンさんは、  
 あそこからここへ来たんだんがすもの。と

「いや、私だつて、ベフに確かじやないの  
 だよ。」と、イエンセンは言つた。「そのお方  
 のお言葉が正しいと思ふ。われわれは行つて  
 見なくてはなりません。」

即刻集めることのできた防壁の武器といえ

ば、<sup>一本の</sup>ステッキと<sup>一本の</sup>短冊傘だけだつた。三人の

冒険隊は、**騒擾**ゾクゾクしなからも、廊下へ

出た。そとは恐ろしくシーンとしていた。一

つの<sup>あかり</sup>燈火が<sup>あかり</sup>窓の<sup>あかり</sup>ドアの下から漏れこいた。

アンダーソンとイエンセンは、ドアの下の守



った。イエンゼンがその把<sup>とて</sup>手<sup>て</sup>をひねった。そ  
 してグツと強く押した。駈<sup>ひく</sup>目<sup>と</sup>トアは驚<sup>おど</sup>き  
 した。

口クリステンゼンさん。ここで一番力のあ

る下男をつねて来て来たか。おれおれ

は、<sup>おれ</sup>おれを<sup>調</sup>うけ<sup>い</sup>りやせん。と、  
 (はいつて)

イエンゼンが言った。

この現<sup>ま</sup>場<sup>ば</sup>からつおれいゆるのをよろしく  
 して、

主人はうなずくをり、急ぎ去った。イエンゼ

ンとアングラーソンが、ドアを見ながら、そと



でとあり！と、  
護士は、振りかえりながら  
言った。

彼の背中は、今、ドアに触れまゐた。——

と！ その腕は、ギョツとドアが突き、一本

の腕が、うぢぢかしく伸びて、彼の肩を爪で掻

いた。 髪はぼろの黄ばんだリンネルを着

けており、見えるだけの皮膚は、長い 灰色の毛

かきえそ いた。

アンダーソンは、嫌悪と恐怖の叫びを

げて、突如叫びイエンゼンを、  
その腕 のほのぬところまで 引き戻

した。するとドアはギイッと開き、低い  
聲がいかくえん。

イエンゼンはなにも見なかつたのだが、

ンターソンが急いで、彼がどんな危険を冒か

したかを話すと、彼は非常に激動状態に陥り、

この計画を<sup>中山</sup>中止、  
彼等の部屋のどちらか

閉め籠もろうと言いつ出した。

だが、彼が<sup>の考えを</sup>何を言つてりゃな時に、

旅館の主人と、二人の屈強な男がやつて来た。

みるは<sup>たふ</sup>博重を<sup>たふ</sup>捕まへ、  
おま、或まきするよ、を面持だつ

大。イエンゼンは、彼等の早口で事の詳細を説明した。が、それで彼等は戦う勇気を失った。あまた失つてしまつた。

二人の男は、持つていた鉄挺めがねを捨ハッパリした。そ

と、~~身を投げた~~<sup>身を投げた</sup>、~~えんま悪魔の巢窟~~

へ、いのちがけの危険を冒して逃げ出した。

はなると言つた。旅館の主人は、みじめにも、

いらいらかろおろしつた。もしそれは危険に又向

つて行かないとこれなれば、ホテルは破滅す

るばかりだし、といつて彼は自分到底で又向うを

んて氣にはなれなかつたかたつた。幸い  
れもアレがーソンは、このへたはつた力（氣）を  
踏（~~た~~）を突見しん。

彼は言つた。曰これが随分評判の、デスマ

ルク人の重氣なめかぬ？、ここにいるのは、

ドイツ人一人むやまい （笑） ~~（笑）~~ （笑） （笑）

なり、敵一人にわれわれは五人のままだ。

二人の下四カヒイエンゼンは、この言葉に刺

刺されて奮（奮）起つた。猛然とドアは （大）

進（進）した。

曰待て！ハアレターソンは言つた。曰あち

てちやいけな。仰高主、あちちハは<sup>あちち</sup>燈火を持

つて、そとにお立ちなすい。そとそ君たつ二

人の誰か、ドアをぶちこわすのだ。ドアが潰

れても中へおびひんじやいけなよ。ト

<sup>下ア二</sup>人ほうますいな。若い方が足を踏み

出し、鉄板を<sup>あちち</sup>振りあげた。上の鏡板めがけて

力まかせの一撃を加えん。<sup>あちち</sup>漆黒の<sup>あちち</sup>漆黒の

<sup>あちち</sup>ちつとと豫想通りの結果にたつた。

た。木は<sup>あちち</sup>裂けも砕けもしなかつた。た

夏衣を壁でも転ぶつたよろい、にふいせ目とたて

ただけだつた。若者はアツとひと聲叫んで、

鉄槌を取り落した。そとと腕をさすつた。一

瞬みまの眼は若者に向けられたが、つづいて

アングーソンが再びドアへ振りかえると、ド

アは痛え失せていた。鉄槌のかなりな深傷を

受け取廊下の漆喰壁が、ちつと彼の背に立

ちはたかつていた。第十三編室集の次女は、

なくなつていゝのだつた!

しほらくは皆、無言のままに、白壁を凝視





イエニセシハ、  
アインソニハ、

この忠告に反対はなかつた。  
彼等は、  
ああ

しん経験をした上では、  
二人、  
いっしょに  
部屋を探が

そつといふ氣持になつてゐた。  
さあ二人は

その暇に用立物を集めるため部

屋へはいつ、  
おんがらひ連れ立つて、一

人は、  
役をさすといふ工合が  
つた。

彼等は、  
彼等の部屋である第十二  
号室と第十

四号室、  
三つあることを  
認め

たつた。

一行アケ

つきの朝、同じ連中<sup>再</sup>は、<sup>再</sup>書第十二号室

に集まうた。旅館の主人は当然<sup>は</sup>外部の助力を

<sup>このこと</sup> <sup>このこと</sup> 辞<sup>は</sup>けたが、つてつたが、<sup>は</sup>そうは言つても、この

家のあの都合の不可思議<sup>は</sup>一掃<sup>は</sup>しなけれはな

いことだつた。そこで、あの二人の下男に、

大工の仕事をやらせ<sup>は</sup>ることにした。<sup>は</sup>直<sup>は</sup>しり

でまゝい位い<sup>は</sup>澤山の<sup>直</sup>板を<sup>は</sup>わして。●家は

<sup>は</sup>取りの<sup>は</sup>第十四号室にもつとも<sup>は</sup>近接<sup>は</sup>して

り、あの都合の<sup>は</sup>床<sup>は</sup>剥<sup>は</sup>かされた。

床板をささえてつ

讀者諸君は、この話の筋から要約、ここで

一箇の骸骨が骸骨あつて、その骸骨があの二

コラス・フランケン博士のひあつと想像するた

ろく。ところがさうであるから、洞木の間に骸骨の間に

骸骨の発見するものは、銅の函骸骨

つた。その中小、きれいにたんとれをウエラム撥皮紙

の記録があつた。二十行はわりなりの書かれ

くつた。アングーソンもイエンゼン小（小）小（小）小（小）

文書学者のなにかであることか小あつたが、

この双天見にはいふくつた留した。これはあの異



せよかし、今思ひ出さるべき事柄もな<sup>い</sup>。

だがその<sup>フライリークス</sup>で「本の前後」は、いつは

この書き入れてある。十年も経たぬの本を所

載してゐるのだが、讀むべき方法を決定し得

ないし、いんやそれなどの用語であつた

も決定し得ない。銅の小函裏にあつた記録

を、時間をあけて研究した後、アンダーソン

とイエンゼンの境界は、こゝから新の境界

に似ないでもな<sup>ら</sup>なかつた。

二日間考えぬいた結果、イエンゼンは、二

人のうちでは大膽なので、この図説は、ラテ

ン説の古代デシマーク説かのどつつかんと、

日頃の推測を下しん。

アンダーソンは、敢えて推測を加えんかつ

た。そして、<sup>進んで、</sup>遺言~~書~~と~~記録~~は、博物館に

陳列するたつ、ヴァイボルグの~~史~~史学舎へ

引き渡す心きたとしん。

新日、この二ヶ月前、甥のアンダーソン

の~~同~~同いたのである。<sup>これ</sup>は二人でウロサ

ラの図書館を認めぬ時で、近くの森林の中~~に~~に





学まねすぎなかつたのだ。曰いつた、あの  
 人は、自分の機嫌をとろろとくわいてる仲間が、  
 どんま仲間なのか、  
 墨をわりそうなるものな  
 のに！ 山

ところで私は、これに對して紋切型の考えを  
 言つたのだが、彼は不平分しく鼻を鳴らした。

その午後、彼は、こゝに讀者（読者）が讀ませよ  
 うな話を、聞かしてくれなつた。だが、

アンダーソンは、この話のいかなる推論を  
 くだ（くだ）す（す）こと（こと）を推し、また、  
 新が彼に對し

てくだらんいかさう推論しても、同意すること  
を拒んだのであつた。